資料

В・И・パヴロフ、И・Б・レディコ

民族民主国家と非資本主義的発展への移行

ソ連邦共産党綱領では、二つの対立する体制の闘争、社会主義革命と民族解放革命、帝国主義の弱化と植民地体制の一掃、社会主義と共産主義の全世界的規模での勝利というような現代の主要な諸現象が、切りはなしがたい相互連関性において考察されている。世界共産主義運動の諸文書、ソ連邦共産党綱領、第二二回党大会の諸資料においては、資本主義から社会主義へ人類が移行するにあたって民族解放闘争がもっとも大きな革命的意義をもっていることが、深遠にもあかるみにだされている。

社会主義世界体制の形成が、帝国主義の植民地体制壊滅の決定的要因となったとすれば、他方ではまた、帝国主義の政治的・経済的支配からの被抑圧諸民族の解放は、新興諸民族のすべてが社会主義的発展の軌道のうえに移行していくもっとも重要な前提条件となりつつある。社会主義革命と民族解放・反帝国主義革命とは、世界革命の単一の過程に合流したのである。「……社会主義革命は、それぞれの国の革命的プロレタリアが自国のブルジョアジーにたいしておこなう闘争となるだけのものではなく、また、主としてそうなるものでもない。そうではなく、それは、帝国主義によって抑圧されているあらゆる植民地と国ぐに、すべての従属国が国際帝国主義にたいしておこなう闘争となるであろう①」ということにかんする、ヴェ・イ・レーニンの予見が実現しつつある。この天才的なレーニンの予見は、社会主義世界体制が形成されて、その規模と力の点で未曽有の植民地主義一掃の闘争が展開された第二次世界大戦後の最初の諸年においてすでに、あたらしい説得的な確認をみいだした。マルクス・レーニン主義諸政党によって指導される労働者階級が民族解放運動の先頭にたったようなアジア諸国の発展は、民族解放革命と社会主義革命との歴史的統一のもっとも明白なあらわれであった。これらの諸国では、社会の政治組織のあたらしい形態――プロレタリア独裁の一形態である人民民主主義――が発生し、これが、社会主義的改革を遂行したのである。

① 『レーニン全集』第三〇巻、一三八ページ〔一五一ページ〕。

人民民主主義諸国――中華人民共和国、朝鮮人民民主主義共和国、ベトナム人民民主主義共和国、およびモンゴール人民共和国――の形成は、資本主義世界経済体制からこれらの諸国が離脱したことを意味した。社会主義陣営、したがってまた社会主義世界経済体制にはいってしまうことによって、これらの諸

国は、植民地的搾取の対象となることをやめたのである。これらの諸国のまえには、民族的生産力の高揚の道が切りひらかれた。アジアの人民民主主義諸国家にとっては、植民地的もしくは半植民地的過去の悲惨な諸結果によってひきおこされる周知の諸困難を克服することが、まださしせまって必要である。社会主義諸国の兄弟的な協力のよりいっそうの強化は、アジアの社会主義諸国家がそれらによって提起された経済的課題を解決する確実な保障なのである。

おなじ時代にアジアでは、民族ブルジョアジーが先頭にたった多数の主権国家が形成された。国家権力の階級的性格が、このばあいに、民族的復興という課題の解決の態度、および、この解決の形態と方法の選択を規定する。アジア・アフリカの平和愛好的な若い主権国家のまえに存在する一般民主主義的課題のなかにはいるのは、つぎのようなものである。すなわち、植民地主義の遺物を一掃すること、外国の独占体を駆逐すること、民族的工業を創出すること、封建的秩序とその遺制を廃止すること、農民層全体が参加して彼らの利益のためになる徹底した農業改革を実施すること、自主的な平和愛好的外交政策を遂行すること、社会生活を民主化すること、政治的独立を強固なものにすることである。

主権をもった生活の時代に集積された経験にもとづいて、愛国的諸分子は、ますますつぎのことを確信しつつある。すなわち、民族的国家体制の再建は、ひじょうに重要なものではあるが、しかしそれは、被抑圧諸国が帝国主義のくびきから解放される途上の第一歩にすぎない、つまり、社会経済的発展の主要な諸課題の解決をめぐる闘争が展開しうる必要条件にすぎないのである。ソ連邦共産党綱領ではつぎのようにのべられている。「民族解放革命は政治的独立をかちとることだけでおわるものではない。もしも革命が社会・経済生活における深刻な変化をもたらさず、民族的復興という切実な課題を解決しないならば、この独立はもろいものとなり、架空なものになりかわるであろう①」。

① 『ソビエト連邦共産党綱領』、モスクワ、一九六一年、四六ページ〔ソビエト大使館発行『ソビエト連邦共産党綱領』、四八ページ〕。

ソ連邦共産党綱領のこの命題の正しさは、侵略的ブロックに引き込まれたアジア諸国を実例にとればとくにはっきりする。これら諸国の支配層は、一般民主主義的秩序のなにほどか重要な改革をあえてしようとしなかった。トルコ、ヨルダン、タイ、パキスタン、フィリッピンの対外政策の帝国主義列強の侵略的志向への従属は、民族的復興の課題を解決することを実際上は不可能にさせた。

アジアの中立諸国家およびアラブ連合共和国では、ちがった状態が形成された。中立主義の条件では民族ブルジョアジーは、帝国主義への従属を一掃する方針をとることができたが、この一掃なくしては、彼らの経済的・政治的立場は強固になりえな

い。民族ブルジョアジーの活動は基本的には、国の経済と政治とにおける帝国主義・封建主義の陣地を制限することにむけられた種々様々な改革に帰着した。それとともに個々の諸国家では、若干の根本的な全民族的課題、たとえば、インドネシアにおけるオランダ財産の国有化やアラブ連合共和国におけるスエズ運河の国有化が、これらのグループによって実現された。しかし、これらの措置もまた、ブルジョアジーは自己の社会経済政策によって資本主義的発展の道を固守しているということをなりよりも証明するものである。

植民地的抑圧から解放されつつある諸国での民主主義的措置にたいする自己の対抗をイデオロギー的に「基礎づけ」ようとめざして、帝国主義者たちは、このような措置がなにもかもみな「共産主義的なもの」であるかのように称している。このばあいに民主的改革の敵がどんな支離滅裂なことまでしゃべっているかは、アメリカ合衆国の上院外務委員会でアメリカ独占体の一つの「研究センター」の指導者、エルドン・L・コルトンによっておこなわれた申立からだけでも判断することができる。インドにおける国営経済セクターの強化は、コルトンの主張するところによれば、「この非共産主義世界でもっとも人口の多い国を社会主義化もしくはソビエト化さえする」ために利用されうるというのである。

東洋諸国における民族資本主義の発展は、たんに基本的な階級的諸矛盾、なによりもまず、人民大衆と封建主義および帝国主義の諸勢力とのあいだの矛盾を処理しないばかりか、逆に、それらをあかるみにだし激化させる。農業政策の経験にもとづいただけでも、われわれはこのことを確認しうる。若干の中立主義諸国において実施された土地改革は、農民層からの農業ブルジョアジーの形成をある程度は促進した。まさに富農層のなか、および資本主義化しつつある地主のなかに支配階級は、農村における自己の影響力の社会的支柱をみいだそうとつとめている。しかし、農民層のもっとも多数をなす階層は、まだけっして封建制度のくびきから解放されてはいない。彼らは、ひじょうに種々様々な形態の封建遺制（債務奴隷的条件での土地小作、高利貸業、商業資本による搾取、その他）の抑圧を体験しつづけ、地主階級のために重い買取金を支払っている。農民層の上層部の利害さえも、封建制度の遺制の完全な一掃をますますさしせまって要求している。このことはすべて、現在の農業制度の徹底的な破砕をめぐって農民層の全階層が共同闘争するための基礎が存在しつづけていることをしめしている。

資本主義のいろいろの道のうえでの発展は、これら諸国の内部ではその地位は弱化しているが、しかしまだけっして一掃されてはいない外国の独占体による搾取からも、勤労者を解放しなかった。それゆえ、民族経済の建設における重大な達成や、社会主義諸国との経済協力の強化にもかかわらず、中立主義諸国家は、今日にいたるまで帝国主義的独占体から搾取をこうむりつつある世界の一部分にとどまっている。これら諸国の発展

は、この発展が資本主義的関係のわくを越えないばあいにも、もはや資本主義の法則性だけによって規定されうるわけではない。この発展にたいしては、社会主義体制の発展の法則性も影響をおよぼしている（国営工業の建設、農業協同組合の組織化、銀行の国有化、その他）。このことは、新興の独立諸国家が資本主義世界経済体制のなかで独自の地位をしめているということを証明している。

多数の事実は、それの名のもとに諸民族が植民地主義者に反対する闘争に立ち上ったいろいろの理想は、非資本主義的発展の道への移行なくしては実現することが不可能であるという進歩的な世論が、これらの諸国に存在していることを確認している。もっとも発展した資本主義列強との競争において社会主義体制が達成したこの体制の巨大な成功もまた、資本主義が歴史的に破滅する運命にあることの自覚をたすけている。アジア・アフリカ諸国において非資本主義的発展という思想がひろまっていることについては、基礎的な民主的改革について考えない極反動の層でさえも、しばしばえせ社会主義的スローガンをごまかして使用しているという事情からだけでも判断することができる。しかし、非資本主義的発展の道への移行の必然性が歴史的に成熟したことをしめす比較にならぬほど重みのある確証として役だつのは、あたらしく形成されつつあるいろいろの主権国家の真に愛国的な勢力がこの問題においてとっている態度であるということはいうまでもない。

愛国的人士のいろいろのグループは、社会主義にかんしてひじょうに種々様々な考えかたをもっている。しかし、資本主義的発展段階――いずれにせよ、西欧的なものにきわめて類似した――を避けたいという共通の志向が、彼らを統一している。

たとえば、自由なアルジェリアのきわめて種々様々な社会勢力の代表者たちが彼らの祖国の未来についていだいている見解がどのようなものであるかが、まさにそれである。一九六二年一一月末に政府によって禁止されたアルジェリア共産党の綱領には、つぎのように書かれている。「急速な経済的発展が保障されうるのは、わが国の人民が自国の経済の基幹部門の非資本主義的発展の道をそもそものはじめからえらぶばあいだけである①」……。アルジェリアの外務大臣、M・ケミスティはつぎのように明言した。「アルジェリアは経済的発展の道をさがしもとめている。われわれにとっては、資本主義的発展の道はまったく受けいれがたい。資本主義は、人民に彼らの労働と獲得との成果をのこさない。アルジェリアは自己の社会主義的な道をみつけだすだろう②」。

① 『平和と社会主義の諸問題』一九六二年九月号、五八ページ〔日本語版、八四ページ〕。

② 『プラウダ』、一九六二年一〇月一三日。

内的発展と全世界的な歴史過程との経験、および、アジアについてアフリカやラテン・アメリカで展開された植民地的かいらい体制の一掃は、今世紀の五〇―六〇年代の境目には、非資

本主義的発展の道への移行の、現代の状勢にもっとも完全に即応するであろうような具体的方法と形態をさがしもとめる問題を、解放されつつある諸民族のまえにとくに鋭く提起した。

非資本主義的発展の道への移行のあたらしい現実的展望を切りひらいたのは、マルクス主義思想である。これは、かつて生じたスターリンの個人崇拝の時代の教条主義的歪曲が除去された結果として可能となった。この歪曲の一つであったのは、アジアの最大の諸民族が民族的国家体制を獲得していることを重視したがらないことである。本質的にはこれは、被抑圧諸民族の闘争の進歩的・革命的な要因としての民族自決権にかんするレーニンの学説の否定を意味した。このような考えかたに賛成するものたちは、民族ブルジョアジーの反帝国主義的潜勢力を否定し、民主・愛国の勢力を一般的に過小評価することから出発した。一般民主主義的戦線の強化と結束とを基礎にした非資本主義的発展の道への平和的移行の可能性が、本質的には排除されたのである。

ヴェ・イ・レーニンの偉大な功績は、とくにつぎの点にあった。すなわち、マルクス主義文献における第一人者である彼は、二〇世紀はじめの具体的諸条件では、アジアの形成されつつある民族ブルジョアジーの一定の諸層は、反帝・反封建の積極的な革命的潜勢力をもっているということをしめした。帝国主義の時代における解放運動のブルジョア民主主義的性格を確定したのちに、ヴェ・イ・レーニンは、自己の民族的国家体制の創設をめざす植民地の進歩的諸階級の闘争の客観的な不可避性を科学的にあかるみにだした。「……資本主義時代にとって、典型的なもの、正常的なものは民族国家である①」。アジアがめざめはじめて以来、国家的自決をめざす被抑圧諸民族の志向は、東洋での諸事件の核心となった、とレーニンは強調した。「そして、諸事件のこの連鎖のなかに、幾多のブルジョア民主主義的民族運動と民族的に独立した単一民族国家を創設しようとする志向とのめざめがみえないものは、盲だけである②」。

① 『レーニン全集』第二〇巻、三六九ページ〔四二三ページ〕。

② 同右、三七八ページ〔四三三ページ〕。

歴史はレーニンの正しさを完全に確認した。われわれの眼前に生じつつある民族的に独立した諸国家の形成と強化とは、帝国主義の植民地体制の崩壊をしるしづけるものであった。

一九六〇年一一月におこなわれた共産党・労働者党代表者のモスクワ会議は、主権をもった諸国家の存在という条件におけるアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの諸民族の解放闘争と二つの社会経済的世界体制の闘争との展望を考察して、民族民主国家という命題を提起した。この命題は、ソ連邦共産党第二二回大会の資料と諸決定のなかで深遠に基礎づけられ、発展させられた。ソ連邦共産党第二二回大会でエヌ・エス・フルシチョフはつぎのようにのべた。「マルクス主義の理論的思想は、発展の客観的なあゆみを深遠に分析することによって、民族の

すべての健全な勢力をもっとも成功的に統一しうる形態をみいだした。この形態は民族民主国家である。このような国家は、どれかある一つの階級の利益ではなく人民の広範な諸層の利益を反映し、反帝国主義・民族解放革命の諸課題を最後まで解決する使命をもっている①」。

① エヌ・フルシチョフ『ソビエト連邦共産党綱領について――一九六一年一〇月一八日のソ連邦共産党第二二回大会での報告――』、モスクワ、一九六一年、一〇八―一〇九ページ〔ソビエト大使館発行『ソ連共産党綱領についてのフルシチョフ報告』、一二九ページ〕。

民族民主国家にかんする命題は、一般的には国家と革命にかんするヴェ・イ・レーニンの学説、特殊的には社会主義的改革の準備と遂行における民主主義をめぐる革命闘争の意義にかんする彼の思想とが発展せられたものである。ヴェ・イ・レーニンが強調したところによれば、資本主義の一定の型の社会経済的進化が存在するばあいには、――全体のなかで民主主義と、資本主義自体のなかでは広範な民主主義的諸要素とが勝利するばあいには――、「民主的な資本」は、資本主義の「末子」、すなわち、生産様式としてのそれの最後の段階なのである。この「民主的な資本」は、資本主義の発展自体を中断して社会の社会主義的改革へ移行するための、有利な客観的前提条件として役だつであろう①。ヴェ・イ・レーニンはつぎのように書いた。「われわれ社会民主主義者が民主主義に味方するのはいつでも、「資本主義のため」ではなく、われわれの運動に道を切りひらくためです②」。この点にかんしてヴェ・イ・レーニンは、他の箇所ではつぎのように書いた。「社会主義へむかってすすまないでは前進することができない③」。

① 『レーニン全集』第三四巻、三八五ページ〔五〇〇ページ〕を参照せよ。

② 『レーニン全集』第三五巻、一九九ページ〔三六一ページ〕。

③ 『レーニン全集』第二五巻、三三一ページ〔三八四ページ〕。

社会主義をめざす闘争における民主的改革の意義にかんするレーニンの思想は、兄弟的な共産党・労働者党の諸文書のなかでよりいっそう発展させられた。たとえば、アルジェリア共産党のあたらしい綱領では、つぎのように強調されている。「……民主的な民族的綱領を実地にうつすならば、アルジェリアを真に社会主義的な制度へ移行させるための経済的・社会的・政治的な前提諸条件をつくりだすことができるだろう①」。

① 『平和と社会主義の諸問題』一九六二年九月号、五九ページ〔八五ページ〕。

民主民族国家のあれこれの形態は、二つの社会経済的世界体制の闘争の現段階にアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの所与の国で形成されつつある諸階級の一定の勢力関係に照応する。民族民主主義のまえに提起される諸課題は、小ブルジョアーを

もふくむ広範な住民層に深い関係をもち、彼らに理解される。このことは大衆の創意性を発展させ、彼らが活動するように鼓舞する。それぞれの民族は、自己の革命的潜勢力をもっとも完全に発揮し、まさにそのことによって世界革命運動に貢献することができる。それとともに、民族民主国家は、社会主義諸国とその人民が自己の国際主義的な義務を完全に遂行し、植民地的抑圧から解放されつつある諸民族に彼らの民族経済と民族文化が発展するうえでありとあらゆる援助をあたえることができるための、有利な諸条件をつくりだす。「民族民主国家は、社会主義諸国の経験が広範に利用される非資本主義的発展の独自的形態である①」。

① 『ニュー・エイジ』一九六二年七・八月号、四八ページ。

東洋の主権国家への社会主義諸国の協力と援助との深い歴史的意義は、ヴェ・イ・レーニンが先見的にあかるみにだした。彼は、ロシアのプロレタリアートは権力をとったのちには、東洋の後進的な被抑圧諸民族にたいして、「ポーランドの社会民主主義者が見事に表現しているように「私心のない文化的援助」をあたえるように全力をつくすであろう、すなわち、彼らが機械の使用へ、労働の軽減へ、民主主義へ、社会主義へ移行するのをたすけるように全力をつくすであろう①」と指摘した。このようにしてヴェ・イ・レーニンによっては、新興の独立諸国にたいする社会主義諸国の援助の客観的意義は、政治的独立の獲得後における解放闘争の基本的諸段階――一般民主主義的段階と社会主義的改革の段階――に対応して、大きな歴史的展望のもとにあかるみにだされている。すべての段階をつうじて、社会主義諸国の「私心のない文化的援助」の意味と内容は、アジア・アフリカ諸民族の必要と希望とに対応する。

① 『レーニン全集』第二三巻、五五ページ〔六八ページ〕。

民族民主国家の一般的な歴史的機能は、非資本主義的発展の道へ移行するばあいの具体的形態と条件との多様性を否定しないし、また、民族民主主義自体の形態の多様性をも否定するものではない。この多様性は、個々の経済的におくれた諸国にとって特徴的な、社会経済的発展水準のちがいからすでにでてくるのである。

民族民主国家の政治的基礎は、すでにのべておいたように、すべての進歩的・愛国的な勢力のブロックが形成され強化されていくなかでつくりだされる。しかし、このことのなかには、このような型の国家の創設の一般的前提条件自体だけが存在するにすぎない。

資本主義的経済制度がすでに支配しており、労働者階級と民族ブルジョアジーが形成され階級として形態をとってしまった諸国では、民族民主国家形成の必要な予備的条件は、愛国的ブロックにおける指導権（ヘゲモニー）を労働者階級が獲得することである。だが、この獲得は、農民と都市半プロ層とがブルジョアジーの影響力から程度の差はあれ抜けだすことがなければ不可能である。進歩的・愛国的な勢力のブロックにたいする

労働者階級と彼らの諸政党による指導だけが、国家権力の独占から民族ブルジョアジーを遠ざけることを可能にする。

もちろん、これと関連して、一般民主主義戦線と民族民主国家の統治とにたいする民族ブルジョアジーの参加の可能性自体にかんする問題が発生する。まずはじめに、解放運動の現段階における民族ブルジョアジーの立場をあきらかにしておこう。このばあい、ブルジョアジーという階級は同質的なものでないということを考慮しておかなければならない。民族資本主義の発展のあゆみのなかで、ブルジョアジー自体の内部における個々の層のあいだの矛盾が、ますますはっきりとあかるみにでてくる。このようなちがいは、「……純粋な、すなわち抽象的な共産主義、すなわちまだ実践的・大衆的な政治行動をとるまでに成熟していない共産主義の見地からすれば、まったくたいしたことのない、つまらないことである。しかし、大衆のこの実践的行動の見地からすれば、これらのちがいは、ひじょうに、ひじょうに重要である①」、とヴェ・イ・レーニンは強調した。しかし、自己の階級的本性の共通性によって、労働者階級との矛盾の共通性によって、また、勤労大衆の活動性が成長してくるのに直面した恐怖によって統一させられる民族ブルジョアジーの種々様々な層は、封建制度の遺制や帝国主義にたいするあれこれの形態の従属が温存される条件での資本主義発展の過程によっていろいろの程度におかされる。若干の低発達諸国における大ブルジョアジーは、経済生活の領域において有力な役割をしめることを要求し、国営経済セクターの犠牲によって利益をひきだし種々様々の減免をうることをめざしている。しばしば大ブルジョアジーは、中・小ブルジョアジーの利益を圧迫することによってこれを達しようとつとめる。大ブルジョアジーの地位が強化し活動領域が拡大していくにつれて、中・小資本の代表者たちは零落していくが、このことは客観的には、中・小ブルジョアジーの不満の増大を促進しないわけにはいかない。中・小ブルジョアジーは、国内市場（この国内市場の成長は、封建制度の遺制と、労働者階級ならびに全住民の低い生活水準とによって拘束されている）が拡大することにたいして、大ブルジョアジーとはくらべものにならないほど強く関心をもっている。というのは、大ブルジョアジーは国家の全面的な支持を利用することによって、不足する国内市場を他の諸手段（国家的請負事業、大規模な対外取引、その他）で相殺する可能性をしばしばもっているからである。他方では、現在の狭い国内市場から競争者を駆逐するために闘うにあたって、大ブルジョアジーは、みずから進んで外国独占資本と協調する――客観的には、自国の民族ブルジョアジーの主要な諸層の利益を犠牲にして――傾向をもっている。たとえばインドでは、独占体が、自由競争の全段階を経過した産業資本主義の基盤のうえではなく、まだ産業革命を完了しない資本主義、狭い国内市場の基盤のうえで発生しつつあるが、この独占体の形成は、ブルジョアジーの残余の諸層から一握りの大資本家たちをさらにますます区別

し、民族ブルジョアジーの隊列におけるよりいっそうの勢力区分を促進しつつある。

① 『レーニン全集』第三一巻、七五ページ〔八三―八四ページ〕。

階級としての民族ブルジョアジーは、強固な独立国家の創設、自立した、帝国主義に従属しない経済の発展、種々様々な形態の植民地主義の除去にたいして客観的には関心をもっている。近年の諸事件がしめしたように、若干の諸国では民族ブルジョアジーは、帝国主義にたいして断乎として反対する能力をもち、そのばあい、たとえば一九五六年のエジプトでのように、植民地主義列強の公然たる軍事干渉という条件での武装闘争に直面してさえもためらわなかった。しかし全体としては、経済的自立の保障と植民地主義の一掃との方法にかんする問題では、ブルジョアジーの種々様々の層は一致した見解をもってはいない。

とくに大ブルジョアジーは、みずから進んで帝国主義と協調・妥協しようとする傾向をもっており、外国独占資本とむすびつこうとめざしている。このことは、植民地主義を成功的に一掃する可能性をいちじるしく縮め、帝国主義にたいするこれら諸国の経済的従属関係が再生産される有利な諸条件をつくりだす。これと反対に中・小ブルジョアジーは、この従属関係の根本的・徹底的な除去、植民地主義の一掃に関心をもっている。中・小ブルジョアジーの関心をみたしてくれるのは、封建制度の遺制のより完全な、より徹底的な一掃、つまり、東洋の大多数の非社会主義諸国における支配層が現在遂行しつつあるものとくらべてよりいっそう思い切った農業政策なのである。

社会経済的発展の最重要な諸問題にかんして民族ブルジョアジーの意見の相違が強まりつつあるとしても、それはかならずしも政治的関係のなかには十分に反映してはいない。ブルジョアジーの相異なる諸層がしばしば同一の政党のなかにその代表者をもっている。しかしこのことは、ブルジョアジーのあいだで諸矛盾が増大し、これらの諸矛盾を基礎にして意見の相違がよりいっそうはっきりとしつつあることの意義を、けっして低めるものではない。

その経済的・政治的な本性によって民族ブルジョアジーは、民族解放革命を徹底的に遂行することはできない。このことは、階級的諸矛盾が激化し深化していく客観的基礎、ブルジョアジーが資本主義的関係の発展、半封建的農業経済の資本主義的農業経済への改造とむすびついたあらゆる困窮をその肩のうえに転嫁しようとしている広範な大衆のあいだで不満が増大していく客観的基礎をつくりだす。

東洋の非社会主義諸国の発展の経験は、民族ブルジョアジーは一般民主主義的改革を遂行することを恐れている、というのは、これは革命的創意性を解放し、勤労者の階級的自覚の発展を促進する、すなわち、窮局においてはブルジョアジーそれ自身に反対してむけられうるような社会的・政治的要因をつよめるからであるということを証明している。

主権をもった一連の中立主義的な東洋諸国において最近二、三年間に実施されたいろいろの政治的・経済的措置は、ブルジョアジーの支配層が、民族資本主義の発展のあゆみのなかで生じてくる諸矛盾の複雑な複合体からの活路をみいだそうとめざしていることをしめしている。これらの諸矛盾は、勤労階級にたいするブルジョアジー自体の内部における衝突と葛藤をも包括している。それゆえ、アジア・アフリカ諸国の対内・対外状勢を綿密に分析することによってのみ、われわれは、たとえばインドネシアにおける「指導された民主主義」体制の確立、アラブ連合共和国における大資本家の財産の国有化と土地改革の新段階、インドの第三次五ケ年計画によって予定された工業化と経済的自立の方針というような措置の本質を正しく評価することができる。

このような措置は不徹底なものであり、矛盾をふくんでいるにもかかわらず、それは、現代では民族ブルジョアジーの支配的な進展傾向は、永続的な修正、内外反動派との接近であるという教条主義的な考えかたを論破する。民族ブルジョアジーの国家政策は、彼らのもっとも先見の明ある代表者たちは、民族的危機を克服もしくは予防するために、大資本の利益を本気で圧迫し（アラブ連合共和国）、ブルジョアジーの個々の右派分子の国政への参加をしりぞける（インドネシア）能力をもっていることを証明している。いうまでもなく、このことはすべて、国家装置とそれの政策とがなにか超階級的な性格をおびているということを意味するものではない。このような措置を実施するにあたって支配層は、第一には、ブルジョアジーの主要な諸層の利益によってみちびかれ、第二には、小ブルジョアジー大衆、なによりもまず農民大衆のあいだでの、また労働者階級のあいだでの彼らの影響力を保持し強化しようとめざす。それとともに民族ブルジョアジーは、自分自身の利益のため、また、広範な大衆との自己のつながりを保持するために、個々の時代においては全民族的課題の水準にまでたちあがる能力をもっている。この事情が、全民族的戦線へ彼らが参加する客観的前提条件をつくりだすのである。

まさに資本主義の全般的危機の第三段階においては、東洋の非社会主義諸国の社会経済的発展のあゆみのなかで、広範な民族民主戦線形成の基本的な諸条件と前提諸条件とが成熟する。この民族民主戦線は、反帝・反封建革命を徹底的に遂行し、一般民主主義的改革を実行していくための闘争を、その目的としている。一般民主主義的統一戦線のなかには、民族的復興の切実な諸課題の解決に関心をもつ民族のすべての進歩的勢力――労働者階級、農民層、民族ブルジョアジーの愛国的諸層、とくに都市小ブルジョア層とインテリゲンチャ――がその代表者をもちうる。このような戦線の中核は、労働者階級と農民層の同盟、すなわち、民族民主革命の全綱領の実現に特別に関心をもっている諸階級の同盟である。

インド共産党の理論的機関誌――『ニュー・エイジ』誌――

に発表された「民族民主国家と民族ブルジョア国家」という論文のなかでは、つぎのように指摘されている。すなわち、この同盟が強力であればあるほど、また強固であればあるほど、「民族ブルジョアジー、それのもっとも進歩的な諸要素が革命の道から離れずに、自己の反帝国主義的志向を保持し、民族戦線に参加する能力を立証するということは、それだけよりいっそう確実である①」。

①『ニュー・エイジ』一九六二年七・八月号、四八ページ。

東洋の主権国家の社会的・政治的生活における労働者階級の役割は、ますますいちじるしくなりつつある。このことを促進するのは、労働者階級の構成、地位、および組織性における本質的な諸変化である。独立の諸年間に労働者階級は量的にいちじるしく補充された。工場・企業経営のプロレタリアートの比重が増大した。たとえばインドでは、それの数は戦前の水準とくらべてほとんど倍増した。最近二〇年間にアフリカの労働者階級はいちじるしく増加し、ほぼ一五〇〇万人をかぞえる。アフリカの労働者階級は、民族的諸組織の基本的勢力、大衆行動および示威運動の参加者の基本的な中核をなしている。しかし、どのアフリカ諸国においても労働者階級は、まだ新政府と国家装置とにおける主導的な勢力ではない。彼らは若い諸国家、とくにガーナとマリにおいては若干の影響力をもっているが、しかし、国の指導権をけっして実現してはいない。南アフリカ共和国、チュニジア、モロッコ、アルジェリア、スーダン、北ローデシアおよびバストランドの共産党は、他の若干の進歩的諸政党と肩をならべて、マルクス主義思想の普及、労働者階級の運動の民族的綱領の作成、全民族的統一戦線の結成にたいして第一義的意義をあたえている。

スーダン共産党中央委員会政治局員、イビラヒム・ムスターファは、すべての革命勢力（労働者階級、農民層、民族ブルジョアジーおよび小ブルジョアジー）を民族民主戦線に結集することが、現在の反動体制を除去し、国の民主的発展の諸課題をはたすもっとも重要な条件であると強調している①。南アフリカ共和国共産党の綱領草案のなかでは、つぎのように指摘されている。「アフリカの大部分では、諸民族が当面しているいろいろの課題は、過渡的段階としての民族民主国家を創設することによってもっともよく解決することができる。民族民主国家の基礎をなすものは、労働者と農村住民との指導的同盟である。このような国家は、非資本主義的な道による、つまり社会主義の道による発展のためのもっとも有利な条件を保障するであろう②」。

① 『平和と社会主義の諸問題』一九六二年八月号、一六ページ〔二五ページ〕。

② 『平和と社会主義の諸問題』一九六二年一〇月号、三七ページ〔五五ページ〕。

種々様々な水準の生産力の独自的な発展条件と社会の階級構造の特質とが、種々様々な国ぐににおける全民族的統一戦線の

指導権の構成と性格とに独自的な特質をもちこむ。

最初の段階では、戦線の指導権は民族ブルジョアジーの愛国的諸部分のなんらかのグループ、とくに都市ブルジョアジーの手中に存在することがありうる。民族戦線は農民的民主主義の政治的形態としても形成されうる。しかし、民族戦線の種類がどのようなものであるにせよ、一般民主主義的改革の実現をめざす民族戦線の闘争は、ブルジョア国家の政策が、ブルジョアジーの階級的利益のわくをこえる圧倒的多数の人民の志向とますます衝突するであろうかぎりにおいて、客観的な不可避性をもって権力の問題を提起するであろう。ヴェ・イ・レーニンが指摘したように、もっとも民主的なブルジョア共和制でさえも、これは、たんに「……資本主義の最良の政治的外被であり、それゆえ資本は、ひとたびこの最良の外被をにぎると……、あまりにも信頼でき、あまりにも確実な基礎のうえに自己の権力をきずくので、ブルジョア民主共和制では、人物や、制度や、政党のどのような交代もこの権力を動揺させることはできない①」。

① 『レーニン全集』第二五巻、三六五ページ〔四二四ページ〕。

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの主権をもつ諸国における階級闘争の論理と経験とは、民主主義的統一戦線だけが解決しうる全民族的諸課題の遂行にもっとも適応するような国家組織は、どのような形態であるかという問題を提起している。大衆の実践と彼らの革命的創造とに巨大な意義をあたえながら、ヴェ・イ・レーニンは、後向きではなく前向きにみること、つまり、「……普通のブルジョア型の民主主義の方をではなく、……生まれつつあるあたらしい民主主義の方を前向きにみなければならない①」と要請した。もしも民族資本の最良の外被が主権をもつブルジョア民主共和制であるとすれば、民族的独立の完全な保障、広範な民主主義、反帝・反封建・民主主義革命の徹底的遂行のために闘うすべての進歩的、愛国的勢力のブロックの国家的・法律的な外皮となりうるのは、民族民主国家——労働者階級、農民層、および民族ブルジョアジーの愛国的諸層の革命的・民主主義的権力の政治的形態——である。「民族民主国家は、ブルジョア民主主義的・反封建的・民族革命が完成し、この革命がよりいっそう発展して、低発達諸国が非資本主義的発展の道へ移行していく道具である②」。

① 『レーニン全集』第二四巻、六三ページ〔七一ページ〕。

② 『ニュー・エイジ』一九六二年七・八月号、四八ページ。

民族民主国家は、形成の瞬間から、疑いもなくその階級的本性においても、また組織構造においても一連の変化をこうむるであろう。このことの基礎は、あきらかに、全民族的民主主義戦線の綱領を実地にうつすための執拗な闘争の過程で階級の勢力関係が変化するということである。労働者階級と農民層および都市半プロ層との同盟が強固になっていくのと同時に、民族ブルジョアジーの二面的な本性がますますあらわれてくるだろう。民族ブルジョアジーは一定の段階では、勤労者の諸政党や

諸組織と協力し、統一戦線の一連の全民族的課題の実現に関心をしめすけれども、彼らは民族全体の利益のためにこれらの課題を徹底的に解決する能力をもたないので、彼らの国政参加にかんする問題がおそかれはやかれ提起されるだろう。

キューバ革命は、民族的復興の一般民主主義的課題の遂行だけにはとどまらず、よりいっそうさきへ、社会主義的段階へと進んでいった。革命のあゆみのなかで、民族政府に変化が生じた。革命の発展を妨害した保守的なブルジョア的諸要素は政府から追出され、プロレタリアート、急進的小ブルジョアジー、および貧農層の代表者たちが政府にはいってきた。このことが、革命を深北させ社会主義的改革へ移行する可能性をあたえたのである①。キューバ革命の経験は、労働者階級に指導権が所属するような形態の革命的・民主主義的独裁だけが、民族解放革命を徹底的に遂行しうるということを確認してくれる。エヌ・エス・フルシチョフはつぎのように強調している。「労働者階級の指導権のもとでのみ、被抑圧大衆は自己の真の解放を獲得することができる②」。

① 『平和と社会主義の諸問題』一九六二年五月号、六八ページ〔一〇二ページ〕を参照せよ。

② 『プラウダ』、一九六二年五月二〇日。

民族民主主義は、非資本主義的発展の道への移行にさいしての不可避的な中間段階ではない。民族ブルジョアジーが進歩的勢力と協力することを決定的に拒否するばあいや、彼らが帝国主義と封建的反動派に接近するばあいには、労働者階級と彼らの政党は、民族の利益の名において、ブルジョアジーを権力から断乎として遠ざけて人民民主主義国を形成するという方針をとらざるをえないかもしれない。

資本主義的経済制度の形成が成功しておらず、したがって、労働者階級が弱体であり、民族ブルジョアジーがまだ形成していないような国ぐに(主としてアフリカ諸国)における民族民主国家にとっては、一連の特徴的な特質が固有でありうる。ここでは、生まれつつある労働者階級、革命的農民層、および進歩的インテリゲンチャの代表者たちが全民族的戦線の先導者に、のちには民族民主国家の先導者になる。これらの諸国において第一義的意義をもっているのは、ブルジョア的イデオロギーの影響力からの勤労者の解放であるというよりはむしろ、人民大衆の意識のなかにおける民族的・家父長的遺制を広範に利用する封建的地主階級の政治的・イデオロギー的な影響力からの勤労者の解放なのである。地主階級自身は経済的な意味においても、また政治的な意味においても同質的なものではないということを、われわれは考慮しておかなければならない。もしも封建的民族主義が反帝国主義的傾向を反映するばあいには、この封建的民族主義の具現者たちが一時的にはすべての愛国的勢力の民主主義戦線のなかに参加しうるであろう。

大多数のアフリカ諸国における民族民主国家の経済的土台は、外国独占体の一掃、自国の工業の発展を基礎にした民族経済の

創出、農民と家内工業者との協同組合への組織化である。この種の民族民主国家では、自国を資本主義的世界経済体制のなかに維持することに賛成する内部的な政治勢力は、存在しないかそうでなければ相対的に弱体であるだろう。若いアフリカ諸国家における階級の勢力関係は、完全独立の達成とむすびついた基本的諸問題を非資本主義的な基礎のうえで解決することをたすけてくれる。経済的にきわめて後進的であるという条件において主権をもつアフリカ諸国で国営セクターが成長していくならば、それは、たんに生産力の成長をたすけるだけではなく、経済関係の植民地的性格の一掃をいちじるしく促進し、非資本主義的発展の道への直接的移行のための重要な条件をつくりだすであろう。一連のアフリカ諸国の人民は、私的土地所有という局面をもとびこえうるであろう。解体過程が進行しつつあるにもかかわらずなお存続している共同体的土地所有と、ヨーロッパ植民地主義者の財産の国有化とは、経済を協同的・協同組合的にいとなむことへ移行するための有利な前提条件をつくりだす。本来的な労働者階級が成長し、国家生活における彼らの役割がたかまり、社会主義陣営との経済的・政治的なむすびつきが拡大・強化していくにつれて、このグループの諸国の民族民主国家においては人民民主主義の諸要素があらわれ、増大していくだろう。内的諸条件の見地からすれば、このような国家の人民民主主義国家への成長転化は、平和的な方法で（封建的ならびにブルジョア的な反動派を隔離しながら）実現することが完全に可能である。

ソ連邦共産党綱領のなかで指摘されているように、あたらしい歴史的時代においてはマルクス・レーニン主義は、すべての進歩的な人類の思考に強い影響をあたえるものとなった。農民大衆、手工業者、インテリゲンチャ、および他の非プロレタリア的進歩勢力の愛国的・革命的な代表者たちはいまや、マルクス・レーニン主義思想を自己の武器としつつある。東洋諸国の社会経済的発展の現段階においてすでにマルクス・レーニン主義は、社会主義的改革を準備する強力な要因となっている。

民族民主国家がどのような形態で存在し発展するにせよ、この民族民主国家の主要な政治的結果として、幾百万という勤労者が積極的かつ意識的に国家生活に参加することになるであろう。疑いもなくこのことは、民族民主国家が社会主義国家へ平和的に移行していくうえで有利なことであるとおもわれる。

アジア・アフリカの若い諸国における民族解放運動の発展と進歩的勢力の闘争のあゆみとをくまなく調べてみるならば、民族民主国家にかんする理論的諸命題はいまや革命的行動の具体的な指導原理に転化しつつあることが証明される。すべてに打克つマルクス・レーニン主義学説に忠実な共産党は、反帝・反封建・民主主義革命の徹底的遂行、民族民主国家、社会進歩のために積極的に闘っている。

――『アジア・アフリカ諸民族』一九六三年第一号、二九―四〇ページ――

〔山口大学　福富正実　訳〕

（訳者のあとがき）

いわゆる「中ソ論争」の一つの焦点として、後進国における民族ブルジョアジーの評価と関連した「革命の道」の問題がある。パヴロフとレディコの論文は、この問題について、いわばソ連側の立場から国家論にまでさかのぼって全面的に回答した注目すべき労作である。なお、「非資本主義的発展の道」の問題にかんしては、拙稿「現代革命と非資本主義的発展の道」〔本誌第三五巻第三号および第四号〕をも参照していただきたい。